

## 文治5年奥州合戦三題 －『吾妻鏡』演習から－

菅野 文夫\*

### はじめに

いきなり私事で恐縮だが、筆者は1986年4月に本学教育学部に赴任し、とうとうこのこの3月で定年退職をむかえる。この35年間、中世史料読解の演習を延々と開講してきた。テキストはいつも『新訂増補国史大系 吾妻鏡』である。同業者からは安直だとの非難が聞こえそうである。

多少の弁解が許されるならば、この本は初学者には格好のテキストである。底本の北条本には返り点や句点が振られており、この種の文体にはじめて接する学生にも読みやすい(ただしこの点があくせ者であることは後述)。それに文体は中世前期公文書の典型ともいえるもので、これが読めれば中世のほぼどんな史料も何とか解読できるし、さらには平安期や近世の史料にも応用可能である。そもそも筆者が大学の専門課程の演習ではじめて課されたのがこれだった。1978年に購入した本を、今も授業のときに携えている。

さらにいえば、鎌倉幕府の成立や、武家社会の主従制といった小中学校の教科書に登場することがらを、研究者も使う素材をもって論じることができる。教育学部の学生にはぜひ読みたい史料である。一例をあげると、承久の乱に際して北条政子が御家人たちに呼びかけるシーンは、小学校6年生の社会、中学校社会の教科書のコラムに頻出するが、承久3年(1221)5月19日条がもとになっている。小学校や中学校の教師をめざす学生がこのテキストと格闘して、自前の教材を作るだけの力量を養成することが、この演習の目的である。

さて、『吾妻鏡』をテキストにするとして、どこを読もうか、毎年迷うところではある。ただしこの数年は多少は意図的に文治5年奥州合戦記事を選んでいく。同じところを読むのは、教師の手抜きを告白するようなもので、これまた安易との誹りをまぬかれないのは承知の上である。しかし、これが平泉藤原氏に関わる最良の史料であることは誰も否定できないところだろう。岩手大学で教職をめざして学びながら、平泉藤原氏について何も知らないというのはいかにも恥ずかしい。中尊寺金色堂の写真は、これまたほとんどの教科書に載っている。さらには、学生諸君の多くは東北地方の出身者である。さまざまな意味で、奥州合戦記事は、学生諸君に一読してもらいたいところなのである。

そんな意図で奥州合戦記事を授業で繰り返し読んでいくと、いかに不明な筆者でも、新たに気がつくことはいくらでもある。史料というものは、そもそもがそうしたものである。大きな

---

\* 岩手大学教育学部日本史学研究室

問題もあれば、取るに足らないことがらもある。ここでは比較のお気軽なことばを3つほど書かせていただこう。もとより思いつきの範囲をでないことばかりである。しかも論証もとぼしく、先行研究も網羅できていない。研究ノートというほどの気迫もなく、呑気な随筆としてお読みいただきたい。たんに3つの話題を提示するばかりで、全体を締めくくるむすびの節もないことを、あらかじめお許しいただきたい。

なお、史料はとくに断らない限りは『新訂増補国史大系 吾妻鏡』の文治5年条である。

## 1. 太っているのは国衡が高楯黒か - 8月10日条 -

奥州合戦記事の前半は、あたかも軍記物を読むような面白さがある。同時代の平家物語や源平盛衰記に比べても遜色がない。その白眉ともいうべきが阿津賀志山の合戦である。8月8日卯の刻に矢合せがはじまり、10日に頼朝の軍勢はようやくここを破った。激戦がくりかえされ、鎌倉方、平泉方を問わず、さまざまな武士たちの戦い振りが活写されている場面である。

この要害の指揮官は西木戸太郎の名乗りを持つ藤原国衡。父秀衡の跡を継いで平泉藤原氏4代を継いだ泰衡の異母兄だから、平泉のナンバー2のようにもみえる。ただし、秀衡は臨終に及んで、妻であり泰衡の母である女性を国衡に娶らせた（『玉葉』文治4年1月9日条）。これをどう解釈するか議論の余地はあろう（大石直正2000）。ただ「兄弟和融」が理由だったとあるところからすれば（前掲『玉葉』）、国衡の立場は泰衡の次位というよりも、母親の後添いとして泰衡を後見すべきものだったと単純に考えておきたい。

そのような国衡こそ最大の防衛拠点を任されるにふさわしい。泰衡自身も平泉を出て国分原鞭楯（現在の仙台市）まで進出し、後衛をなしていた。平泉としても決戦の備えである。戦闘は「国衡輒難敗傾」く鎌倉方の武士たちは「振武威棄身命」てて戦い、「其闘戦之声、響山谷動郷村」すというほどに激しいものだったが、ついに平泉方が敗れる（8月10日条、以下も同じ）。阿津賀志山陥落の急報を受けて泰衡は国分原の陣を撤退するが、国衡もまた出羽方面に落ち延びようとする。おそらくはかねてよりのプランBだったのだろう。

国衡の捜索にあたったのは和田義盛と頼朝軍の指揮官（先陣）の畠山重忠だが、義盛の方が一足先に国衡に追いつき、夕暮れの決闘となった。互いに名乗りあい、馬上で弓を引き絞り、じりじりと相手をねらう。典型的な一騎打の場面である。国衡が弓を射るその僅か前に義盛の放った矢が国衡の腕にあたり、ひるんだ国衡と二の矢をつがえようとする義盛の間合いが開いた。そこに畠山重忠の軍勢が割って入り、重忠の門客大串次郎が国衡に飛びかかる。逃れようとする国衡は愛馬を道路から深田に落としてしまい、ますます身動きが取れなくなり、ついに討たれてしまう。戦いの緩急を書き分けた『吾妻鏡』の筆者の力量を感じさせる名場面である。

ところで『吾妻鏡』は国衡の乗馬も克明に描く。「国衡所駕之馬者、奥州第一駿馬〈九寸〉、号高楯黒也、大肥満国衡駕之、毎日必三ヶ度、雖馳登平泉高山、不降汗之馬也」とある（〈〉内は小書き、以下同じ）。これは普通、「国衡駕する所の馬は、奥州第一の駿馬〈九寸〉、高楯黒と号するなり。大肥満の国衡これに駕すること、毎日必ず三ヶ度、平泉の高山を馳せ登るといへども、汗を降らさざるの馬なり」と訓まれる。なるほど、国衡は「大肥満」だったのか。その国衡を乗せて、平泉のどの高山かはわからないけれども、毎日3度もものぼって汗をかかないパワフルな馬だ、という解釈になる。高楯黒のたくましさ、国衡の巨体が同時に印象づけられる。

ついでに言えば、奥州合戦が、その一世紀半ほど前の前九年合戦を強く意識した戦いだったことは、よく知られている(川合康1989など)。康平5(1062)年9月17日に厨河で討たれた安倍貞任は「其長六尺有餘、腰圍七尺四寸、容貌魁膊、皮膚肥白也」とある(『陸奥話記』)。超人的な巨漢のそのイメージも、国衡に投影してしまう。

しかし、本当に藤原国衡は「大肥満」だったのか。『吾妻鏡』はこの場面で、敢えて国衡の体躯に言及する必要があるのか。ここからが本題である。

いうまでもなく、成立した時点での『吾妻鏡』には、返り点も、句点や読点も振られていない。ただし『新訂増補国史大系 吾妻鏡』が底本として採用した北条本には返り点、句点などを施してあり、この場面では既述のような句点が振られている。だから「高楯黒と号するなり。大肥満の国衡これに駕すること」と訓んでしまうのだが、文の本来の区切りは、「号高楯黒也、大肥満、国衡駕之」ではなかろうか。「高楯黒と号するなり。大に肥満す。国衡これに駕すること」ではないか。「大肥満」が形容するものは国衡ではなくして、高楯黒のことではなかったか。

文字の置き方だけからすれば、訓み方はともに可能である。いくら凝視しても行間からは何も出てこない。そこで状況証拠を集めて、肥満していたのが高楯黒だった可能性に少しくこだわってみたい。

そもそも弓馬の道に携わるものの乗馬が“飼ひに飼うたる馬”と表現される例は枚挙にいとまがない。たっぷりのえさを与え、手塩にかけて育てたその馬は太くたくましくなる。これが名馬の第一条件である。寿永3(1184)年の一ノ谷合戦で、源義経の乗馬は「鹿毛なる馬の太く大なる」、あるいは「宿鶯の馬の太く逞が、尾髪足れる」であり、畠山重忠は「三日月と云栗毛馬の太逞に」乗っていた(『源平盛衰記』)。“太くたくましい”はすぐれた馬を賞する慣用表現であって、その対語が瘦馬である。これでは満足に戦えない。

とはいえ「肥満」の語が馬の形容としてなじむかということ、あまり普通ではないかもしれない。試みに当の『吾妻鏡』でこの語を検索すると、文治元(1185)年11月12日条にみえる。駿河国の有力在庁である岡辺泰綱が源頼朝上洛計画を聞きつけ、鎌倉に馳せ参じた。しかしすでに上洛中止が決定していたし、「肥満泰綱、騎用之馬無之歟」という有様なので、頼朝はしばし猶豫を命じたという。病気のために太りすぎて、乗れる馬がなかったのである。これは人間の肥満で、馬のことではない。

古記録ではどうかと、東京大学史料編纂所の「古記録フルテキストデータベース」で探すと、『小右記』に4件の「肥満」記事がある。最初の長和2(1013)年7月21日条は相撲人の候補が「肥満」だったが「強力」の身体ではなく、年もとっていたので角力には向かなかったという内容だが、長和3(1014)年5月17日条は左馬頭藤原保昌が勅禄を賜ったという記事で、「依御馬令肥満、賜保昌禄」とある。馬寮の馬を肥満させて褒賞を受けたのである。また、摂政藤原頼通が馬允為政に給付された馬を馬寮に返すことを命じ、「如元勞飼、十ケ日内令肥満可奉」と述べたことを記す寛仁2(1018)年5月14日条、石清水臨時祭に出走させる適当な馬が馬寮にはおらず、代わりの馬を使おうとしても「所遺二疋不肥満」だったので他の馬を探すよう指示したことを載せる長元4(1031)年3月22日条がある。なお寛仁の記事の馬は、陸奥交易御馬だった。いずれにしてもこれら3例の「肥満」が、“太くたくましい”馬のことを述べたものであることは間違いない。11世紀前半の『小右記』と鎌倉末期に成立した『吾妻鏡』では3世紀近い開きがあるのが難点だが、「肥満」はすぐれた馬を形容する言葉として長く用いられたのではないか。

ここで奥州合戦に従軍した鎌倉方の武士たちの心情を推し量ってみよう。彼らの記憶は、『吾妻鏡』の筆者の視点にも反映されているに相違ない。

12世紀後半の関東の武士たちにとって、奥州の馬、なかでも糠部の馬はあこがれの的だった。糠部は現在の青森県東部から岩手県北部にかけての地域だが、平泉藤原氏の時代に、馬牧をもとに一戸から九戸まで戸と東西南北の門という独特の地域編成がなされた（入間田宣夫1986など）。源頼朝の厩には3疋の糠部産の馬が秘蔵されていた。三戸立の磨墨、若白毛、七戸立の生唆である（『源平盛衰記』）。生唆は「黒栗毛の馬、高さ八寸、太く逞が、尾の前ちと白かりけり、当時五歳、猶もいでくべき馬」だったという。その評判は関東の武士たちの間に広まっており、木曾義仲追討のため軍勢がいよいよ鎌倉を出陣というおりに、梶原景時が生唆の下賜を願い出た。頼朝は、生唆はいよいよ自分も出陣という時の乗馬だといってこれをことわり、代わりに磨墨を景時に与えた。磨墨も「太逞が、尾髪あくまで足たり」という名馬だった。ただ、佐々木高綱が出陣の挨拶に来ると、どういふ心変わりか頼朝は生唆を高綱に与えてしまう。磨墨に乗った景時と生唆を駆る高綱とが、宇治川で先陣を争った合戦譚は後世の語りぐさとなった。また武蔵国の武士熊谷直実は「能馬に心得たる」舎人の源太に上品絹200疋を持たせて陸奥国に遣わし馬をもとめさせた。源太は「陸奥国一戸に下て、牧の内走廻て撰勝て」栗毛の馬を買ひ得た。「長こそちと卑かりけれ共、太逞こたへ馬の、はたはりたる逸物」で、舎人の名をとって源太栗毛と名付けられた。その乗り換えとして用意された西楼も「白き馬の太逞が、尾髪飽まで足れり、三戸立の馬也」とある（同前）。

糠部の駿馬の名声は京都にも鳴りひびいていた。奥州合戦後、頼朝の貢馬をうけた後白河上皇は「戸立など出来之体」を喜んだ（文治6年3月14日条）。「戸立」はすなわち糠部産のことである。

ところで『源平盛衰記』は、頼朝の厩の3疋は平泉藤原秀衡の子息である元吉冠者高衡からの進物だったと記す。かつてはエミシの地であった陸奥国北端の再開発も軌道に乗り、糠部ではたくさん名馬が産出されるようになった。ちょうど時代は全国的な内乱に向かっている。そのような時に、秀衡が頼朝への非公式の挨拶を兼ねて販売促進のため、子息をつうじて馬を貢進させたと考えるのはうがち過ぎだろうか。ともかくも、平泉藤原氏がたくさん名馬を保有しているという評判は、奥州合戦の時代にはたしかにあった。しかもそうした印象は、『吾妻鏡』編纂時にも受け継がれていたとみてよい。

奥州合戦記事に戻ろう。描かれているのは藤原国衡の乗馬高楯黒だけでない。下須房太郎秀方は阿津賀志山で国衡の次将となった金剛別当秀綱の子息だが、僅か13歳なるも「強力之甚不似若少」という勇者で、「駕黒駿馬、敵向髦陣、其気色掲焉也」という鮮烈な印象を与えている。対する鎌倉方の武士たちの乗馬については、戦功の証拠として言及されるにとどまり、戦陣を彩るものとして描かれることはなかった。

奥州合戦記事に登場する陸奥の馬は、戦闘場面にとどまるものではない。頼朝は帰着に先だつて馬10疋を鎌倉の若公（頼家）に送っている（11月11日条）。奥州みやげである。頼朝の鎌倉帰着後1ヶ月あまりたって御所に新たな厩が完成した。「被建御厩〈十五箇間〉、奥州駒中被撰上馬三十疋、始被立置之」とある（12月9日条）。11月8日に「征奥州之後可令所務給条々被申之」ためと翌年の上洛準備の目的で、大江広元を京都に向けて出発させた。広元は諸方への進物として「竜蹄百余疋」を携え、このなかには頼朝自身の名目による進物の「鞍馬十疋」も含まれていた（11月7・8日条）。ほとんどが奥州の馬だったとみてよからう。

このうち20疋は、翌年2月に、朝廷にたいする正式な貢馬として解文などを副えて貢進された（文治6年2月2日条）。陸奥国から朝廷への公式の馬の貢進は、11世紀までの陸奥交易貢馬から平泉藤原氏による貢馬を経て、頼朝による貢馬へと継承されたという（大石直正1988）。この時の貢馬は、頼朝が、朝廷が平泉藤原氏に認めていた広範な権限を継承したことを象徴的に表現するものだった。この継承は、前年12月6日に頼朝が「奥州羽州地下管領間事、明春可有御沙汰歟」と後白河政権に求めたものだが（同日条）（七海雅人1997）、後白河がこれを了承したことをうけてこの貢馬が実現したのだろう。3月5日付で出された後白河の院宣に「御馬廿疋被進事、近年不及此程員数、所感思食也、每事復旧歟」とあり、また「必可歴御覽歟」と、正式な貢馬として受け取ることが明言されている。公家政権が頼朝による奥羽の支配を正式に認めたことが読みとれよう。

ずいぶんと本題から逸れてしまった。話をもとに戻すと、要は「大肥満」は国衡か、高楯黒かということである。僅かな点の振り方の問題であり、どちらに解釈しても大問題ではない。とはいえ、くどくどと述べてきたところからすれば、『吾妻鏡』の筆者の視線は国衡の体格よりも、高楯黒のたくましさに注がれていたと思えてならない。「奥州第一駿馬〈九寸〉、号高楯黒也、大肥満国衡駕之」との記述は、現状では九寸だけが小書きだが、「号高楯黒也、大肥満」もまた、本来はこれにつづく小書きの割り注だったのではなかろうか。

## 2. 陣岡にたなびく旗 — 9月4日条 —

奥州合戦で鎌倉方は軍勢を3手に分かち奥羽に攻め入った（7月17日条）。千葉常胤・八田知家を大將軍とする東海道軍は、下総・常陸国経由で北上する。比企能員・宇佐美実政を大將軍とする北陸道軍は、上野国から越後国を経て海岸沿いに出羽国にはいる。畠山重忠を先陣とする大手の軍勢は東山道を北上した。これが頼朝をいただく、いわば中央軍である。東海道軍は陸奥国府多賀城で中央軍と参会するが、9月4日、頼朝が志波郡に到着した時に、北陸道軍も合流する。ここに、頼朝配下の全軍が勢揃いしたことになる。その様を『吾妻鏡』は次のように記す（同日条）。

今日、二品令陣于陣岡蜂杜給、而北陸道追討使能員、実政等、靡出羽国狼嘖、参加之間、軍士廿八万四千騎〈但加諸人郎従等、〉也、面々打立白旗、各倚置黄間、秋尾花混色、晩頭月添勢云々、

28万余騎が一堂に会する様は、それは壮観だったろう。この文章はその鮮烈な記憶をもとに書かれたに相違ない。わずかな字数だが、“面々白旗を打ち立て、おのおの黄間に寄せ置く。秋の尾花は色を混え、晩頭の月は勢を添う”と声を出して読むと、不思議と臨場感がある。源氏の白旗が立ち並び、そのそばに弓（黄間）が立てかけられている。うっそうとした薄（秋尾花）の原に、夕暮れの月が風情を添える。ただし、そこにたなびいていたのは果たして白旗だったか。そこを問題にしたい。

『国史大系』には底本の北条本と諸本の異同が詳細に記載されているが、「白旗」は北条本によったもので、鼈頭の註によれば吉川本では「白旗」とする。『吾妻鏡』の古写本のうち北条本は小田原北条氏に伝えられたものを主とするが、しかし近世に追補されたものもあること、またこれと別系統のまとまった写本の代表が吉川本で、それは大内氏重臣の右田弘詮が大永2

(1522)年に書写したものであること等々は、『吾妻鏡』の演習でまず最初に学ぶことがらである。そして、北条本と吉川本の文字が異なる時、後者で読んだ方が意味が通ることが少なくないことを経験的に知るのである。

実は遙か昔、といっても筆者が岩手大学に赴任した後のことだが、研究仲間の誰かに、ここは「自旗」の方が良いのだと聞かされた記憶がある。それが誰なのかすでに忘却の彼方であり、その理由も問いたださず、会話はすぐに別の話題に移ったのだろう。ただ、近年になってあらためてこの記事を読むと、たしかに「自旗」のほうが良いように思う。筆者なりの理由を述べよう。

奥州合戦記事には、前述の馬だけでなく、旗にも妙にこだわった記事がある。出陣前に頼朝は遠征のため旗を新調させた。前九年合戦に源頼義が用いたのと同じ一丈二尺二幅の寸法で、上部に伊勢大神宮・八幡大菩薩の神名を、下部に八幡の神鳥である鳩を白糸で刺繍したものである(7月8日条)。もっともこれはひとつだけ、頼朝のそば近くに立てかけたのだろう。頼朝のいわば本陣は源氏の白旗を指したのであって、そのことは次の7月26日条からもうかがわれる。

廿六日甲申、令立宇都宮給之处、佐竹四郎自常陸国追参加、而佐竹所令持之旗、無文白旗也、二品令咎之給、与御旗不可等之故也、仍賜御扇〈出月、〉於佐竹、可付旗上之由被仰、佐竹随御旨付之云々、

このとき頼朝は宇都宮を出立するが、常陸国の佐竹秀義が参上した。佐竹氏も頼朝と同じ河内源氏なので無文の白旗を指していた。ところが頼朝は自身の旗と同じものを指すことを許さず、「出月」のデザインの扇を与えて旗の上に指すよう命じた。これが後世まで「扇に月丸」とよばれる佐竹氏の家紋のおこりである。武士の家紋の由来譚で『吾妻鏡』まで遡るのはまことに珍しい。

それはともかく、頼朝が無文の白旗を許さなかった理由を考えよう。この時期の秀義の立場は微妙である。もともと父隆義が平家に従ったため、治承4(1180)年11月に頼朝軍に攻撃され、一時は奥州に逃げ込まざるを得ない状況にあった。その後の頼朝との関係は不明だが、佐竹氏が正式に臣従し、鎌倉御家人に列したのはまさにこの宇都宮でのこととされている。常陸国を拠点とする佐竹氏が、千葉・八田率いる東海道軍を避けて、敢えて中央軍の頼朝のもとに参上したのは、そうした経緯ゆえのことだろう。とはいえ、こうした背景は旗の問題には直接関係しない。7月26日条からは、無文の白旗は「御旗」として、頼朝のいわば本陣に相当する部分でのみ許されていたものであることを読み取ることができる。逆にいえば、従軍した武士たちは、「御旗」とは異なるそれぞれの家の旗を指していたことになる。そもそも頼朝に従った関東の武士たちの圧倒的部分は桓武平氏や秀郷流藤原氏などである。白旗を用いる理由はない。

このことは城長茂に関わる記事を見ると一層明らかである。越後国に大きな勢力をもった城氏もまた、頼朝や木曾義仲の挙兵後、これを封じ込めようとする平家と結んだ。その推挙により、養和元(1181)年8月15日の除目で長茂は越後守に任じられる(『玉葉』同日条)。平泉藤原秀衡が陸奥守になったのと同じときである。ただし木曾義仲と戦って敗れ、その後の経緯ははっきりしないが、奥州合戦の時期には梶原景時の預かる囚人となって鎌倉にいた。7月19日の鎌倉出陣の間際になって、景時はこの長茂の罪を許し従軍させることを頼朝に提案し、許可を得る。長茂は、「但為囚人差旗之条、有其恐、可給御旗之由申之」と頼朝に願い出た。囚人の身で自分の旗を指すのは恐れ多いので、「御旗」を賜りたいというのである。これにたいして

頼朝は、長茂に「私旗」、すなわち自分の旗を用いることまで許した。長茂は喜んで周囲のものに、行軍中にこの旗を掲げていれば逃亡してちりぢりになった郎従が集まるだろうと語った。果たして軍勢が新渡戸駅（現在の栃木県那須塩原市）にさしかかった時には、200余名の郎従が長茂のもとに馳せ参じていた（7月28日条）。

以上からすると、志波郡に集結したおびたしい武士たちが、一様にいわゆる源氏の白旗を立てていたとは思われない。それぞれが自分の家の旗を立てていたとする方が自然である。「私旗」はすなわち「自旗」である。志波郡の薄の原にたなびき、薄暮の月が照らしていたのはさまざまなデザインの旗ではなかったか。

### 3. 鎌倉軍の往路と帰路、そして奥羽の吉書始 — 9月20日条など —

源頼朝は文治5（1189）年7月19日に鎌倉を出陣し10月24日に帰陣した。この3ヶ月半ほどの行軍が奥州合戦である。もっとも、北陸道軍の比企能員が鎌倉を出立したのは7月18日のことだから（同日条）、軍事行動の起点はこの日とすべきだろう。もちろん、『吾妻鏡』はもっぱら頼朝の中央軍について述べており、東海道軍や北陸道軍の動向についてはほとんど記載がない。

そしてその中央軍についての記事だが、『吾妻鏡』の書きぶりは、前半の往路と後半の帰路ではまったく異なる。一読して、それは明瞭である。そのことを述べよう。

前半の書き方は、次のようなものである。くどくなるのを承知で、あえて主なできごとを本文とともに列挙しよう。7月19日鎌倉を出発「十九日丁丑、巳剋、二品為征伐奥州泰衡発向給」、7月29日白河の関を越え「廿九日丁亥、越白河関給」、8月7日伊達郡阿津賀志山辺国見駅に到着「七日甲午、二品着御于陸奥国伊達郡阿津賀志山辺国見駅」、翌8日より10日まで合戦「七日甲午、二品着御于陸奥国伊達郡阿津賀志山辺国見駅」「八日乙未、金剛別当季綱率数千騎、陣于阿津賀志山前、卯剋、（中略）始箭合」「十日丁酉、卯剋、二品已越阿津賀志山給」。8月12日多賀城に到着し、東海道の軍勢と合流「十二日己亥、（中略）晩景令着多賀国府給、又海道大將軍千葉介常胤、八田右衛門尉知家等参会」。8月22日暴雨のなか平泉に到着「廿二日己酉、甚雨、申剋、着御于泰衡平泉館」。9月2日厨河に向かい平泉を発ち「二日己未、出平泉、令赴岩井郡厨河辺給」（岩井郡は岩手郡の誤り）、9月4日志和郡に到着し北陸道軍と合流「四日辛酉、着御于志波郡、（中略）而北陸道追討使能員、実政等、靡出羽国狼喉、参加之間」。9月11日岩手郡厨河に到着し「十一日戊辰、（中略）自是厨河柵者、依為廿五里行程、未属黄昏、着御件館云々」、まる7日を過ぎた後の19日に平泉にむけて厨河をあとにする「十九日丙子、立厨河柵、令還向平泉保給、御逗留厨河七ヶ日也」。

ここまでの記事はこのようにおしなべて、いつ、どこに到着したかが、その時刻も含めて几帳面に書き込まれている。当たり前のことのようにみえるかもしれないが、後半の帰途はそうではないところが興味深い。

9月20日に奥州羽州の吉書始を行い、そののち論功行賞があったが、その場所がどなか、書かれていない。翌21日に頼朝は胆沢郡鎮守府の八幡宮に奉幣している。胆沢郡到着の日時は書かれていない。次の22日に葛西清重に「陸奥国御家人事」の奉行を命じた。これは翌々24日の「平泉郡内檢非違使所」管領の命令とともに、奥州惣奉行体制のおこりとなる重要なで

きごとである。おそらくは22日に平泉に着いたものと推測されるが、そのことは明記されていない。23日は無量光院を巡礼し、27日は安倍時頼の「衣河遺跡」を訪れているから、このあたりは平泉にゆっくり滞在していたはずである。平泉を立ったのは9月28日だが、やはりそのことは明瞭には記載されない。「廿八日乙酉、二品専敗泰衡之辺功、飽掌俊衡等帰往、漸還向鎌倉給」と述べるのみである。ただし達谷窟に立ち寄ったことがみえるので、平泉出立であることがわかるのである。10月1日には頼朝は多賀国府にあって、郡郷莊園所務のことなど条々を地頭に命じた。多賀城に着いたのがこの日なのか、それ以前に到着していたのか、定かでない。10月19日には下野国宇都宮に奉幣した。往路にも戦勝祈願に奉幣しており、そのお礼参りだが、往路は「廿五日癸未、二品着御于下野国古多橋駅、先御奉幣宇津宮」とあるにもかかわらず、帰路は到着の記事がない。さすがに10月24日の鎌倉帰着だけは、「廿四日庚戌、申剋、御帰着鎌倉」と時刻まで記載されているのが、かえって不思議なくらいである。

きっちりと行程が記載される往路と、そうでない復路は好対照をなす。奥州合戦記事編纂の素材として採用されたものが、行きと帰りではまったく別個であった可能性がたかといえよう。そもそも奥州合戦記事の編纂材料がどのようなものであったか。以前より議論があり、今後とも検討が続けられるべきおおきな研究課題で、ここでは迂闊に触れるわけにはいかない(大石2004など)。ただ、この行きと帰りの書きぶりの違いは無視できない論点だろう。

往路と帰路を、また別の面から比較してみよう。いうまでもなく往路は戦いの道である。合戦記事がそのほとんどを占める。これにたいして、帰路は、いわば統治の道だった。頼朝による奥羽統治が帰途のわずか1ヶ月あまりで完成するわけではないが、しかしこの時期にはじまることは疑いない。往路の最後と帰途のはじまりが、9月11日から9月19日までの厨河滞在である。12日の椀飯は戦闘の終結を慶賀したものでしょう。その後の主なできごととしては、①9月20日の奥羽両国の吉書始めと論功行賞、②9月22日・24日の葛西清重の奥州惣奉行任命、③10月1日の多賀城での条々の命令の3点が重要だろう。

このうち②は、すでに述べたように平泉でなされた。奥州惣奉行体制自体は、翌年の大河兼任の乱後に陸奥国留守職に伊沢家景を任命することによって正式な出発となるが、葛西清重はこの9月の段階で藤原氏に代わる陸奥国の軍事的権限と、平泉の統治をまかされることになる。③は『吾妻鏡』に明記されているように多賀城でのできごとである。地頭等に郡郷莊園所務についての条々を命じた頼朝は、さらに施政の原則を表明している。“国郡を費やし土民を煩わす”ことを禁じ、また「以庄号之威勢、不可押不当之道理、於国中事者、任秀衡泰衡之先例、可致其沙汰」と書いた紙を国府の庁舎に貼らせたのである(10月1日条)。陸奥国の庶政の中心である多賀城で、新たにこの国の統治の権限を有するものらしく振る舞ったのである。藤原氏の拠点平泉と陸奥国行政の中心である多賀城は、まさに帰途において頼朝が新たな支配者であることを宣言するのうってつけの場所だった。問題は①である。

①の「奥州羽州等事吉書始」は、頼朝が奥羽2国の支配者であることを表明した最初である。『吾妻鏡』はたんにそれが挙行されたことを述べるのみだが、統治者としての行事である。これより前、厨河滞在中の9月14日に頼朝は「奥州羽州両国省帳田文已下文書」をもとめている。平泉で焼失してしまったこれらの文書の代わりに、藤原氏に仕えていた清原実俊・実昌兄弟に「両国絵図」を提出させ「諸郡券契」を定めた(同日条)。この兄弟は能吏ぶりをかわれて頼朝に召し抱えられ、実俊は幕府の公事奉行人という高級官僚になるが(建久2年1月15日条)、この時用意された文書が吉書として用いられたのかもしれない。奥羽両国にたいする頼朝の権限



は、先述のように「奥州羽州地下管領」権として、正式には翌建久元(1190)年春に朝廷より公認されるが、それはあくまでも朝廷との関係における政治的手続きであって、頼朝自身はこの時すでに宣言したのである。

そのような重要な吉書始がどこで行われたか。くりかえすが、『吾妻鏡』はその場所を記載しない。結論からいうと、志波郡を擱いてほかに場所はないように思う。「吉書始之後、糺勇士等勲功、各被行賞訖」(9月12日条)とあって論功行賞も同時になされているからである。ちなみに清原兄弟の提出した絵図は、この時にも役に立ったことだろう。

頼朝の中央軍は厨河より往路を引き返した。東海道軍、北陸道軍はどうだったか。そのまま中央軍に随伴して東山道を鎌倉に向かったわけではあるまい。同様に往路を引き返したとするのが自然だろう。東海道軍は多賀城までは同行するものの、そこからは常陸を經由して帰還したのだろうし、北陸道軍にいたっては志波郡で分かれて秋田方面に向かったはずである。3軍がいずれも行軍の途中に参陣した武士を抱えていることから、そう考えざるを得ない。とすれば、28万余りの全軍が一堂に会することができるのは志波郡しかないのである。

帰還が統治の道であることは、北陸道軍にとっても然りだったはずである。「奥州羽州等事吉書始」によって出羽も含んで支配者の交代が宣言された以上、北陸道軍はそのことを出羽国府などで告知する仕事もあろう。そして論功行賞である。これについて『吾妻鏡』は「其御下文今日被下之、或先日被定置之、或今所被書下也」(9月20日条)と記す。所領宛行の下文を給された人物として名前まで明記されているのは、東海道軍の千葉常胤と中央軍の先陣畠山重忠のみだが、「此外面々賞不可勝計」とあって全軍が対象になったはずである。9月7日条で北陸道軍の宇佐美実政と天野則景が、平泉方の有力武将由利八郎を生虜にした手柄をめぐって頼朝の前で争っている。出羽での戦闘の生虜だろう。そうした戦功争いの結果もこの日の行賞に反映されたはずである。以上が吉書始と論功行賞は志波郡でなされたと考える所以である。あるいは9月11日厨河まで北上したのは頼朝とその周囲のいわば幹部クラスのみで、軍勢のほとんどは志波の薄の原に滞在していたとさえ想像できよう。

こうした想定が許されるとすれば、それは3軍の帰路の都合にとどまらない意味があったはずである。いうまでもなく、志波郡比爪館には平泉藤原氏の近親の樋爪氏がいた。樋爪氏の当主俊衡らは9月4日に館に火をかけて奥方に逃亡したが(同日条)、9月15日に一族を率いて厨河滞在中の頼朝に帰降する(同日条)。少し遅れて18日は泰衡兄弟のうち唯一生き残った本吉冠者高衡と、「泰衡一方後見」の熊野別当も降人となった。『吾妻鏡』はこれを「凡残党悉以今日獲之給也、粗考先規、康平五年九月十七日、入道將軍家(頼義)於此厨河柵、獲貞任、宗任、千世童子等頸給、叶彼佳例、今達宿望給」と記す。厨河で敵将を降伏させるというのは、前九年合戦を意識した演出である。とはいえ、頼朝軍が高衡や熊野別当を平泉などでとらえて潜に厨河まで連行したとの想像は、あまりに不自然である。高衡らは、泰衡が平泉をすてた時点で移動し、比爪館に結集して樋爪氏とともに最後のときを待っていたに違いない。

比爪館はそのような場であった。平泉藤原氏にとって北方の最重要拠点である。さらに鎌倉の北陸道軍のルートを考えても、藤原氏にとっても陸奥のみならず出羽にも通じる支配の拠点だった。近年の考古学上の成果からは、比爪館周辺には相当の都市的空間が存在した可能性が指摘されている(岩手県立博物館2004)。比爪館の主要建築物は焼失したにしても、それなりの建物は残っていたろう。比爪館は、頼朝が奥羽両国の支配のはじまりを宣言する場所としてももっともふさわしかったといえよう。

## むすび

冒頭に、本稿はむすびの節もないと書いてしまったが、やはりそれはあまりに格好が悪い。とはいえ、論旨をくりかえす必要もないようなことしか書かなかつたし、奥州合戦論の今後の展望や課題を提起するのは骨が折れる作業で、いまは気力がもたない。

ただ、論述のむすびはさておいて、本学での教師生活のむすびなら、多少は語るべきかもしれない。35年という歳月は、筆者にとっても人並みに大きな意味を持っている。退職にあたって、さまざまな意味で、節目というものを重く感じている。研究仲間の話を聞くにつれ、岩手大学は、また教育学部は、恵まれた職場だったとの感が強い。そうした好環境を生かし切れたかといえば、忸怩たる思いを禁じ得ないところもあるが、自身の力量を振り返ればあまり高望みはすべきでないかもしれない。それにしても、何とか勤めおおせたのは良き同僚と学生諸君のおかげである。深甚の謝意を表する次第である。なかんずく『吾妻鏡』演習につきあっていただいた履修者諸君には、心より御礼申し上げる。横道に逸れることが多く、授業時間の相当部分が雑談に費やされることも珍しくなかったこの授業は、筆者にとって教師時代の良き思い出である。

## 〈引用文献〉

岩手県立博物館テーマ展図録『比爪—もうひとつの平泉—』2004年(執筆は羽柴直人氏)

入間田宣夫「糠部の駿馬」(初出は1986年、同著『北日本中世社会史論』2005年に収録)

大石直正「奥州藤原氏の貢馬について」1988年(同著『中世北方の政治と社会』校倉書房、2010年に収録)

大石直正「次子相続・母太郎」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』33、2000年(のち「奥州藤原氏の相続形態」  
として同著『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館、2001年に収録)

大石直正「『吾妻鏡』と文治奥州合戦」『六軒丁中世史研究』10、2004年

川合康「奥州合戦ノート—鎌倉幕府成立史上における頼義故実の意義—」(『樟蔭女子短期大学紀要』文化研究3、  
1989年)

七海雅人「鎌倉幕府の陸奥国掌握過程」『羽下徳彦先生退官記念論文集・中世の杜』(東北大学文学部中世史研究会、1997年)